

---

# キスキミ

成太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キスキミ

### 【Nコード】

N8644F

### 【作者名】

成太

### 【あらすじ】

清水鷹虎と藤川若葉の二人の甘酸っぱい青春LoveStory

## プロローグ

私は今高校の門の前にいる

「若葉、ごめんだった？」

手を降りながら女の子が近づいてくる

「うっん今来た所！行っか！」

私は宮崎若葉今日から高校一年生！隣にいるのは幼稚園からずっと一緒の藤川美優ちゃん！明るくてスポーツ万能で可愛いの

「あっほらクラス割り張り出されてるよ！」

私はクラス割りを見るうん！？何か見たことある名前が

「美優ちゃん？なんで桐島君の名前があるの？」

「えっ若葉知らなかったの？桐島君この高校受けたのよ？」

「あれ？そうだったっけ…」

私は完璧にミスをしてしまった…まさか桐島君と同じ高校しかも同じクラス…なぜ私が桐島君をこんなに嫌がるかは話したくもない

「私達はA組だねえ！行こうか…」

私達は教室に向かった一年の階は活気に溢れている

さっそく友達を作る人女の子にアドレスを聞くチャラ男

私達は教室に入る

私達はとりあえず空いてる席に座る他の人達は話したり寝てたりいろいろだ

「よっ宮崎と藤川！」

横を見ると桐島君が立っている

なんで話しかけるのよ…

「…」

私は黙ったまま下を向いた

「おっおはよう…」

美優ちゃんが答えてくれた

「また同じクラスなんだな！まっよろしく！」

桐島君は廊下側の1番後ろに座った

「ねえあの人超かつこよくない？」

「えっ本当だあ！まぢいかっこいいね！」

クラスの女子が騒ぎ出し桐島君の回りの席に移動し始めた

へんつミ―ハー女め！その内痛いめにあうぞ！

「それでねえ…」

私は美優ちゃんと果たしている時にフツと入口に目を向けたその時  
一人の男の子が入って来た

私は彼に目を奪われてしまった 短い髪 スラツとした体 綺麗な  
顔 イケメンって言葉は彼のためにあるんなあゝ

いかんいかん 顔で判断すると痛いめにあうって桐島君で思い知っ  
ただろ！

私は頭を横に振った

「ちよつと若葉？どうしたの？」

私は美優ちゃんという言葉で我を取り戻した

「えっ？いやなんでもない！ははっ…」

彼は窓側の一番後ろに座った

「ねえあの子もイケメンじゃない？」

「どれ？本当だ！ちよつと向こう行こう！」

桐島君の所にいた女子の半分が男の子の所に移動した

男の子はびっくりした顔をする

「よーしちゃんと全員いるなあー！」

担当が入って来た担当の先生は国語担当の北野幸男先生だまだ35歳くらいだろうか？

まづは自己紹介をした

彼の名前も分かった

清水鷹虎君 南中から来たらしい

そのあとは席決め最初だからと自由席になった桐島君と清水君はその場を動かなかったためその二人の回りを桐島君派の女子と清水君派の女子が取り囲む用に座った

清水君は助けを求めてたみたいだけど女子の声に遮られ誰も答えはしなかった

その女子達を取り囲む用に男子

私は美優ちゃんと隣ならどこでもよかったため逆ハーレムになってしまった！

入学式から数週間後初めての学校行事ようは遠足って奴

今年は

「〇×市県立自然公園」に行くらしい

その前に問題なのは

バスの席決めだ私は桐島君とが良い！私は清水君と！始まったよ女子共！って私も数カ月前までしていたが

「わがまま言わないでくれよ！」

学級委員の宮内君が困っている

「おい！清水！お前のファンなんだからお前で何とかしろよ！」

たまらず宮内君はこの騒ぎの張本人の一人清水君に助けを求める

「！？しっしらねえよ……」

清水君は机に伏せている

あんまり乗り気じゃないようだ

「じゃあっクジにしたら？」

桐島君が提案をだす

「そっそれ貰い！」

桐島君と清水君をバスの1番後ろに固定して後の座席に番号を振る  
これでなんとかバスの席決めはうまくいった私は宮内君に頼んで先  
に美優ちゃんと隣にしてもらった

数週間後 遠足当日

「〇×市県立自然公園」とは高校からバスで40分くらいの場所  
にある公園 なかなか大きく 軽い登山も楽しめる公園だ

私は公園に着くと美優ちゃんと二人で植物園に行ったり動物ランド  
で小動物と遊んだり楽しんだ

お昼は美優ちゃんの彼氏高杉君と合流し三人でお弁当を食べた！高  
杉君と美優ちゃんは中学からずっと付き合っている

食べ終わった後美優ちゃん達は二人でどこかに行ってしまったため  
私はハイキングコース（初心者コース）を上り始めた

20分くらいでかなり開けた所に来た

なかなか傾斜もきつく女の子には上級者くらいの感じだ

うんっあそこに誰かねっころがつてる？同じ高校だな？

私は気付かれない用に離れた所に座りスケッチブックに下書きを始  
めた

「なんで離れた所に座るの？」

私はハツとした後ろを見るとさつき寝そべっていた男の子が後ろにたっていた

「べつに横に来てくれても良かったのに！」

「しっ清水君！？なんでここに？」

私は急いでスケッチブックをたたんだ

「なんで？っておかしい？おれがここにいるの？」

清水君は私の横に座った

「だってさつきまで他のクラスの女子とか同じクラスの女子とかとバスの中にいたから…」

「あっあれ！巻いて来た！腹痛いって言って」

清水君はクスツと笑った

なかなか小悪魔だなこいつは？

「ああ言うの苦手なんだよ俺！」「えっなんで？」

「話すなら外にしない？って言っても暑いとか汗かくとか疲れるとか意味が分かんない！」

清水君はまた草村に寝そべった

「そっそうなんだ……」

「そう言えば宮崎さんとちゃんと話すの初めてだよね！」

「えっあっそうだね……」

「なんか避けてる？俺の事？」

「いやあべつにそんな……ただ機会が無かっただけ……」

「そっか……なら良いんだけど！」

ガバツ清水は勢い良く起き上がった

「ずっと言おうと思ってたんだけどさ……」

「なっなに……？」

清水君は私の顔を覗き込む……やめてえ〜恥ずかしい

「ちよちよとど清水君顔近い……」

「あっごめん……やっぱり宮崎さん眼鏡外した方が良いと思うよ！」

えっ私は意外な答えにびつくりした

「またまた……冗談上手いんだから！みんなにそう言ってるんですよ

「！」

私は少し清水君から離れた

「それどう言う事？」

「えっ？」

「みんなに言ってるって？宮崎さんには俺そんな風に写ってるの？」

「いやそうじゃないけど……」

「そうだよな…あんだけ女に囲まれてたら俺女の子苦手なんだ……」

「またまた……」

「本当だよ!」

ピィピィピィピィ

ちょうど良い所にアラームが

「あつもうこんな時間だ…下りなきゃ!」

私は立ち上がった

「まだ平気でしょ？」

「私歩くの遅いから!じゃ先行くね!」

私は降り口の方に歩き始めた

「あつちようと俺も！」

私は清水君と二人で歩き始めた 途中滑り安いところが多々あったが清水君が手を貸してくれてなんとか降りれた さすがチャラ男は優しい！

「若葉くこつち！」

「あつ美優ちゃん！」

私は美優ちゃんの所に歩き始めた

「またあの中に帰らなきゃいけないのね…」

清水君はトボトボ清水君の帰りを待つ女の子の輪の中にはいった

遠足からまた数週間後

ゴールデンウィークを利用した林間学校だなんてゴールデンウィークまで学校の奴らと…

そしてもう見飽きた光景

「だから無茶苦茶言つなよ！」

また宮内君が困っている

いつもの用に桐島君となりたい清水君とが良い！うるさいんだよばーか

「グループの人数は決まってるんだから！」

宮内君の静止など聞かない！

「じゃあっ私達変わるうか？」

美優ちゃんか言い出した

「えっ宮崎？」

「私と若葉は変わってあげる！良いでしょ若葉？」

「うっうん…」

私達は清水君と同じグループだった

「えっ！？まぢいかよ？」

小さく声が聞こえたが誰の声か間では分からなかった

結局 私は美優ちゃんと武下くん木村君菅井君と同じグループになった

「良かった…藤川さん達で！」

武下君が言った

「えっ何で？」

「桐島達の清水達の言ってる女子達と一緒になくても楽しくないだろ！」

「そっそっただね！」

数週間後 林間学校当日

バスは桐島君は清水君と同じグループに慣れなかった女の子達がバスぐらい近くにしろと騒ぎだし騒然としたが何とか出発した

高校から二時間くらい離れた避暑地に行く！バスの後ろは騒がしい！桐島君は女の子達と笑いながら話しているが清水君は窓を見ながら適当な返事であしらっている

みんな寝息をたてているのに後ろの席はうるさい…

「若葉く着いたよ!」

「うつつう…眩しい…」

「ほら行くう!」

バスを降りると自然が目に入って来る

これはスケッチには最高だ!

清水君と桐島君が女の子をぞろぞろ引き連れて降りてくるそこに他のクラスの女子も混ざり　すごい集団になった

お昼はキャンプ場で自分達で作るらしいメニューはミートソースのスパゲティとサラダ

私達の班は男子も協力的で重いものは運んでくれたり私と美優ちゃん料理に専念出来た

他の班は男子がサボっていたりキヤーキヤー言いながら料理を作ったり特に清水君の班なんかひどかった私達が食べ終わり　片付けをしている最中に食べ始めた

「おいしかった!藤川料理上手いね!」

「ありがとう武下君!たまにお母さんとやるから!」

「へえ〜藤川と宮崎が同じ班でまぢい良かったよ!清水の班なんか

江口は涙目で食ってたぞ！」

「そっそれは災難だあ…」

私はナゼカ清水君が心配になった

食事の後は自由時間美優ちゃんは高杉君とどこかに言ってしまったし

よしどこか絵がかけるスポットを探そう！

私はキョロキョロしながらスポットを散策した

「おい藤川！こっち！」

私は木の影から読んでいる清水君のに近づいた

「ちようとかいー！」

ガシッ

清水君は私の手首を掴み林の中を歩き始めた

「ちよっちゃんとどうしたの？」

「良いから！」

少し歩くととても開けた場所に出た

「はあ〜綺麗…」

私はその光景に目を奪われた

「昨日パソコンで調べたんだ！絵が書くそんな場所！」

「えっ？あつありがとう…！」

「別に藤川のためだけじゃねえよ！俺も逃げたかったからさ！」

そつだよ私！バカバカバカー私のためにそんな事してくれるわけ

「十分時間あんだろ？絵書けよ！」

「なんで知ってたの？」

「遅くまで美術部大変だな！」

「えっなんで？」

「たまに下駄箱から出てくんの見えたからさ！」

「えっ清水君部活入ってるの？」

「俺サッカー部！知らなかった？」

あつだから夕方グラウンドの端っこに女子の軍団が

私は絵に書きたい場所を選び座った！私の横に清水君は寝そべった  
ゆっくり時がすぎてゆくまるで世界に二人しかいない見たいに

「そつ言えばご飯どうだった？」

私は清水君に聞く

「最悪…俺でも作れる料理を…むしろスパゲティーなんかまずく作る方が難しいだろ？」

「たしかに…そうだよね…」

それもそうだよ！ちゃんとレシピも渡されてるんだから！

「若葉の方はおいしかったらしいじゃん…」

清水君が羨ましいそうに言ったっておいおい今何て？

「今なんて？」

「えっ？いや武下が言ってたから…」

「そこじゃなくてその前！」

「若葉？」

「そうそこ！」

「なんで？へん？」

「いやあいきなりだったからびっくりしただけ…」

「呼んじゃダメ？」

「うっうっん…大丈夫！」

「良かった！ありがとう！若葉俺の事下の名前で！」

「私は良いよ…」

「お願い！」

もぉ～その顔で頼まれたら断れる訳ないじゃん！

「鷹虎君？」

「違う！」

「じゃあ…」

「さんもダメ！」

「鷹虎？」

「それ！」

赤い顔を隠すようにスケッチブックに向かう

私達二人はそれっきり会話をすること無くただゆったりと過ぎる時間を過ごした

「出来た！」

うん割れながら上出来じゃ！

横で寝ていた鷹虎も体を起こした

「うまいなあ！さすが美術部！」

「あんまり上手く行かなかったけど…あつまうこんな時間…」

もうちょっと二人でいたかったけど夕食の時間に遅れる訳にはいかない！

「よし！いこうか！」

えっちょっと！

鷹虎はまた私の手首を掴み歩き始めた

夕食 夕食のメニューはキャンプ定番カレーライスにサラダコンソメスープ

昼食と同様私達の班は役割分担をし組織的に料理を作った（笑）

武下君達はよっぱどお腹が空いていたのかまだかまだかと待っている

ズズッ

「うん！上出来！美優ちゃん！ルーOK！」

「ご飯もバツチリ！」

私達はまた1番最初に食べ始めた！

フツと鷹虎の班を見るとまたグタグタやっている昼と違うのはルーを鷹虎が一人で作っている事かなあ！

「ごちそうさま！おいしかった！」

武下君達は綺麗にたいらげてくれた！と思ったらご飯が少し残った

「若葉どうする？このご飯？」

「う〜んおにぎりにする？」

「それ名案！」

武下君言った

「でも海苔が無いね…」

「海苔なんかいらないよ！」

高菜おにぎりは六個出来た

「あのさあ私二つもらって良い？」

「えっ良いけど！意外に藤川さんって食べるね！」

勘違いされてる…まっいつかなんとかなく鷹虎が気になったただけだから…

夕食の後はレクリエーション大会とか言ってドッジボール大会ありえねえ〜小学生かよ！

やる気も無く適当に交わして終わりをまった

レクリエーション大会終わった後は少し自由時間

女子と話す男子 枕投げをする男子 恋バナをする女子 いろいろ！私は鷹虎に会いに行こうとしたが相変わらず女子に囲まれ近づけない

珍しく私達の高校は男女が階で区別されていない

おいおいこの年頃の男子は怖いよ

私達はどうやら鷹虎達の部屋と隣らしいしかも同じ部屋の女子はほとんど鷹虎派だから壁にコップを付けてとなりの会話を聞こうとしているバカかあんたら

「そう言えば最近若葉って鷹虎君と仲良くない？」

一人の女子が私に絡んで来た

「別に仲良くないけど…気の性だよ…」

「なら良いけど！」

まったく自分が相手にされないからって！

夜中

みんな寝静まった後私は寝れない…

何で寝れないのかわからない…ただ隣の部屋がスツゴク気になる

私は壁に耳を付けて隣の音を聞こうとした

バカバカバカーみんな寝てるのに

あんのじょう聞こえて来るのは誰かのいびき…

「はあゝ寝れない…」

ガラガラ

私はベランダに出た

うゝん気持ち良い風！静かだな！

私はベランダにある椅子に腰掛けた

「なにやってんだお前？」

隣から鷹虎の音がする ふんっ気の性だよね

「おいシカトかよ！」

また聞こえる目を開けて横を見るとベランダのフェンスに腰掛けて

いる鷹虎がいた

「あつ危ない！」

私は声をあげた！

「ばかつみんな起きんだろ！」

「あつごめん…危ないよ！」

「大丈夫だよ！気持ち良いし！」

「でっでも…」

「わかったよ！よつと！」

タンツ鷹虎は上手く着地した

「このベランダ繋がってたんだ…」

「俺もさつき知ったよ！まったくうちの高校は甘いよな！男子と女子が隣の部屋ちかもベランダが繋がってるなんてな！」

私はドキッとした

「そっそうだよね…」

「今だって俺が若葉の事襲おうと思えば襲えるし…」

鷹虎は私の目をじっと見た

「じょっ冗談辞めてよ…」

ウツウツ…辞めて…

「ハツハハ！冗談だよ！そんなに奮えなくても！」

カタカタカタ

私震えてる…

「もう！バカ！」

「ごめんごめん！怒った？」

「ううん…大丈夫！」

「良かった…若葉が怒ったらどうしようかと思った…」

「あっそうだ！ちょっと待ってて！」

私は部屋に戻りおにぎりを取ってまたベランダに戻った

「はいつ！これ！」

「なにこれ！」

鷹虎は不思議そうに手にした

「おにぎり！またちゃんと食べてないんじゃないかと思って！」

頑張れ私！

「本当だあ！ありがとう！食べて良い？」

「どうぞ召し上がれ！」

鷹虎はまるで子供の用におにぎりを食べた

「うまかった〜ごちそうさまー！」

「どういたしまして！」

やったやったよ私！

「ルーしか食べなかったからさ！さすがにルーだけじゃきつかったよ…」

「ルーは食べれたの？」

「ルーは俺が一人で作ったからな！ご飯なんかベチャベチャなのと固くて食えないの！」

「ハハハ飯盒は難しいからね！」

ガラガラ

「なにしてるの若葉？」

私は後ろを見た

「みつ美優ちゃん！ごめん起こしちゃった？」

「ううん…トイレに起きたら声がしたからさ！」

美優ちゃんは私の横に座った

「こんばんは！」

鷹虎が声をかける

「こんばんは清水君って何で清水君！？」

美優ちゃんはびっくりしたかおで聞き直した

「隣の部屋とベランダが繋がってるの！ベランダに出たら鷹虎がいたから少し話してたんだ！」

「そうなんだ！あゝびっくりした！おかげで目が覚めちゃったよ！」

「ハツハ八宮崎もおもしろいなあ！」

その後は美優ちゃんを混ぜて三人で起床時間まで話した！

ビービービー

誰かのアラームが聞こえたため私達三人は急いで各自の部屋に戻った

「お前起きてるかあ〜?」

担任の北野先生が入ってくる

「まあ〜先生!入るならノックくらいしてよ!」

「悪い悪い!でも着替えてないなら良かっただろ!」

「着替えてたらどうするんですか?」

「全員おきてるなあよし次の部屋だ!」

先生は出て行った

う〜ん少しくらい寝れば良かった…

ゴシゴシ

「大丈夫若葉?昨日まったく寝てないんでしょ?」

「うん…」

「ラジオ体操の時は何とかごまかしてあげるからちよっと寝てなよ

「！」

「でも…」

「寝てなさい！」

美優ちゃんがちょっと怒った

「はい…」

私は部屋に残りぼあくとしていた…

「さて一眠りするかあ！」

ベランダから声がある

ガラガラ

「鷹虎？」

「わっ若葉？なにやってんだ？」

「鷹虎こそ？」

「眠いからラジオ体操さぼった！」

「私も…」

「若葉が？似合わねえ〜！」

「うつうつるさいなあ…」

「ハツハ八まついつかぁ！今は本当寝るよ！」

鷹虎は椅子に座りタオルケットをかけて寝始めた

「私も寝よう…」

私も座りタオルケットを掛け眠りに着いた

静かな時間だけが過ぎていった

「おい清水！いるかぁ？」

ガラガラ

誰かがベランダを開けた

「うつうつん…」

「なんで藤川が？」

私は声の方をみた

「きつ桐島くん？」

「お前らなにやってんだよ？」

桐島君の声で鷹虎も起きた

「なに騒いでんだよ桐島？」

鷹虎は体を起こした

「なにって？こんなとこ先生に見られたらやばいだろ？」

「あっそつか…全然気にしてなかった！」

「たくつ！藤川もこんなところ女子に見られたら何されるかわかんねえぞ！」

「うっうん…そうだよね！鷹虎はファンいるし…」

「そつだよ私何かが一緒にいちゃダメなんだよ…」

「ほら鷹虎行くぞ！」

「あつああ…じゃあな若葉！またな！」

鷹虎は桐島に連れられどこかに行った

「はあ…少し距離置こう…」

「若葉？起きた？」

「美優ちゃん！」

「よし大人しく寝てた見たいね！そろそろハイキングの時間だから行こう！」

「うっうん…」

ハイキング 今日ハイキングらしい！グループに分かれて出発！  
スタンプを押して帰ってくる単純なもの！「若葉？ちよつと顔赤い  
よ？大丈夫？」

えっ私顔あかいんだ：確かにちよつと暑いかも

「うん！大丈夫！ちよつと暑いだけかなあ！」

「そう？無理しないでね！」

「うん！」

私達の班の後に鷹虎の班が来るらしい…

「お〜い藤川！宮崎！」

下から鷹虎の声がする！

いかんいかん答えちゃダメだ！距離を置こつて決めたんだから！

「行こう武下君！」

私達はサッサと上がって閉まった

「なんだあいつ？それにしても今日暑いなあ…」

「清水大丈夫かあ？顔赤いぞ！」

「あんっ？大丈夫だろ！」

私達は半分上った所だった

「ほら若葉見て綺麗！」

「ほんとだあ〜！」

カシャツ 私はカメラで取るのが趣味見たいなもの

「良し行こうか！」

武下君達が昇り始めた時

バタン

「えっ？若葉？ちよつと若葉!？」

若葉が急に倒れた

「ちよつと藤川？」

「おい清水なんか上騒がしいぞ？」

「えっ？」

鷹虎は耳を済ました

「…葉…葉…丈夫若葉大丈夫？」

「若葉？」

鷹虎は上に向かい走り始めた

「ちよつと木村！先生読んでこい！」

木村が上に先生を呼びに行った

「ハアハアおいどうした？」

鷹虎が若葉の所にたどり着いた

「清水君…若葉が若葉が…」

美優が泣きながら鷹虎の手を掴んだ

鷹虎は若葉の額に手を当てた

「あちいつ！こいつ熱あるじゃねえか！」

「ええ？だつてさつきは元気に…」

「早く降ろさねえと…俺がおぶつてく！さっ行くぞ！」

「ちよつと清水！今木村が先生呼びに行ったから先生が来てから！」

武下が鷹虎を止める

「んな事言つてる暇ねえくんだよ！」

鷹虎は若葉を背負い下に向かい走り始めた

「私も…」

泣きながら美優も下に向かい走り始めた

「若葉！頑張れ！もうすぐ着くからな！」

鷹虎は若葉に声をかけながら走り続けた

「おいっ清水！どうした？」

「若葉が倒れたあゝ！」

途中桐島達のグループとすれ違ったが止まる事無く下に向かい走り続ける

「高杉！」

「おっ清水！なんだいそいで…藤川？おいどうしたんだよ？」

「ハアハア熱で倒れた！それより多分宮崎が俺達の後を追ってる！」

「何だつて？」

鷹虎はまた下に向かい走り始めた

「清水ゝ！」

下から先生の声がした

「先生」

鷹虎は下り終わった

「ハアハアこいつ熱があるみたいだ…ハアハア早く医務室に…」

鷹虎は若葉を教室に渡すとその場に倒れた

「おいっ清水！？こいつも熱がある…誰か手を貸せ！こいつも医務室だ！」

医務室

うつんっ私どうしたんだろ…体が暑い

「若葉？若葉？」

美優ちゃんの声がする

「うつんっ美優ちゃん？」

「良かった…もう若葉のバカ…」

泣きながら美優が私に抱き着く

「ごめんねえ…」

「下まで清水がおぶってくれたんだ！」

うん誰だろう？

「きつ桐島君？」

「たくつ心配かけやがって…」

「ごめん…鷹虎は？」

「病院だよ！」

「病院？なんで？」

「清水君も風邪だったの若葉は遠足熱って言う突発的な病気ですぐ直る見たいけど清水君は風邪だって若葉を届けた後に倒れたの…」

「！？そんなあ…鷹虎大丈夫なの？」

「今北野先生が着いてる…大丈夫だと思っけど」

「いやあいやあ私バカだあ…」

「もう大丈夫だから…」

「部屋に戻っても良い見たいだから…」

「うん…」

「じゃ桐島君ありがとう！若葉は私が着いてくから…」

「そっか…わかった！無理すんなよ！」

その後私達は部屋でゆっくり過ごした

「入るぞ！」

北野先生が入って来た

「先生…清水君は？」

「大丈夫だ！ただの風邪らしい！清水はもう帰らせた！」

「良かった…」

「藤川！お前も気を付けろよ！」

「はい…スイマセン」

「じゃお前は明日の帰りの時間まで部屋にいていいからな！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8644f/>

---

キスキミ

2010年10月26日14時07分発行